

2018年(下期)

芥川賞&直木賞

芥川賞受賞作品

『ニムロッド』 『1R1分34秒』
上田 岳弘/著 町屋 良平/著
(講談社) (新潮社)

それでも君はまだ、人間でい続けることができるのか。あらゆるものが情報化する不穏な社会をどう生きるか。新時代の仮想通貨小説。

なんでおまえはボクシングやってんの？ 青春小説の新鋭が放つ渾身の一撃。長年のトレーナーにも見捨てられ、変わり者のウメキチとの練習の日々が、ぼくを、その心身を、世界を変えていく――。

直木賞受賞作品

『宝島』
真藤 順丈/著
(講談社)

英雄を失った島に、新たな魂が立ち上がる。固い絆で結ばれた三人の幼馴染み、グスク、レイ、ヤマコ。生きるとは走ること、抗うこと、そして思い続けることだった。少年少女は警官になり、教師になり、テロリストになり一同夢に向かった。超弩級の才能が放つ、青春と革命の一大叙事詩!!

芥川賞候補作品

『ジャップ・ン・ロール・ヒーロー』
鴻池 留衣/著
(新潮社)

我々に可能なのは、盗むことだけ。「ポスト真実」の時代を射貫く話題作。1980年代に海外進出を果たしたバンド「ダンチュラ・デオ」は実在したのか？ 慶大生バンドの戯れは、やがて歴史的陰謀の情報戦へと巻き込まれてゆく。

『居た場所』
高山羽 根子/著
(河出書房新社)

かつて実習留学生としてやってきた私の妻・小翠(シャオツイ)。表示されない海沿いの街の地図を片手に、私と彼女の旅が始まる。記憶と存在の不確かさを描き出す。

『平成くん、さようなら』
古市 憲寿/著
(文藝春秋)

社会学者・古市憲寿、初小説。平成を象徴する人物としてメディアに取り上げられ、現代的な生活を送る「平成くん」は合理的でクール、性的な接触を好まない。だがある日突然、平成の終わりと共に安楽死をしたいと恋人の愛に告げる。愛はそれを受け入れられないまま、二人は日常の営みを通して、いまの時代に生きていること、死ぬことの意味を問い直していく。なぜ平成くんは死にたいと思ったのか。

『熱帯』
森見 登美彦/著
(文藝春秋)

沈黙読書会で見かけた『熱帯』は、なんとも奇妙な本だった!謎の解明に勤しむ「学団」に、神出鬼没の古本屋台「暴夜書房」、鍵を握る銚色のカードボックスと、「部屋の中の部屋」…。東京の片隅で始まった冒険は京都を駆け抜け、満州の夜を潜り、数多の語り手の魂を乗り継いで、いざ謎の源流へー!

『童の神』
今村 翔吾/著
(角川春樹事務所)

平安時代「童」と呼ばれる者たちがいた。彼らは鬼、土蜘蛛、滝夜叉、山姥……などの恐ろしい名で呼ばれ、京人から蔑まれていた。一方、安倍晴明が空前絶後の凶事と断じた日食の最中に、越後で生まれた桜暁丸は、父と故郷を奪った京人に復讐を誓っていた。さまざまな出逢いを経て、桜暁丸は、童たちと共に朝廷軍に決死の戦いを挑むが…。

『戦場のレビヤタン』
砂川 文次/著
(文藝春秋)

国系の石油プラントを守るため、イラクの紛争地帯に進んで身を投じた武装警備員のKは、キルクークからアルビルへ伸びる国道を北上していた。なぜこの地にやってきたのか、戦争とは何か、何が戦争を作り出すのか。敵は誰なのか。

『ベルリンは晴れているか』
深緑 野分/著
(筑摩書房)

大統領の自死、戦勝国による侵略、敗戦。何もかもが傷ついた街で少女と泥棒は何を見るのか。1945年7月。ナチス・ドイツが戦争に敗れ米ソ英仏の4カ国統治下におかれたベルリン。ソ連と西側諸国が対立しつつある状況下で、ドイツ人少女アウグステの恩人にあたる男が、ソ連領域で米国製の歯磨き粉に含まれた毒により不審な死を遂げる。米国の兵員食堂で働くアウグステは疑いの目を向けられつつ、彼の甥に訃報を伝えるべく旅出つ。しかしなぜか陽気な泥棒を道連れにする羽目になり一ふたりはそれぞれの思惑を胸に、荒廃した街を歩きはじめ。最注目作家が放つ圧倒的スケールの歴史ミステリー。

『信長の原理』
垣根 涼介/著
(KADOKAWA)

何故おれは、裏切られ続けて死にゆくのか。織田信長の飽くなき渴望。家臣たちの終わりなき焦燥。焼けつくような思考の交錯が、ある原理を浮かび上がらせ、すべてが「本能寺の変」の真実へと集束してゆく――。まだ見ぬ信長の内面を抉り出す、革命的歴史小説!

